國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕坂本薫著『神奈川県の方言アクセント：小田原から横須賀まで』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 那須, 昭夫, Nasu, Akio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000627

〔書評〕

坂本薫著『神奈川県の方言アクセント ―小田原から横須賀まで―』

那須昭夫

本書は、神奈川県方言アクセントの実態を臨地調査に基づいて記述した研究書である。その目的は、同県のアクセントの伝統的な相を明らかにすることと、同県でのアクセントの地域差を捉えることである。本書ではその成果として、神奈川県内には「現時点でもある程度安定性を持った言語集団が残されていたこと」を見いだし、そのアクセントの様相が「西関東方言のアクセントの特徴を多く保っている」ことを明らかにしている（p. 11）。

一般に、神奈川県は独特の方言的特徴に乏しく、アクセントに関しても東京と同様の型が全県的に広がっていると認識されているきらいがある。しかし、神奈川県のことばを没個性と断ずるのは皮相的な見方である。本書で具体的に示されるように、神奈川県内のアクセントの実相は地域的多様性に富んでいる。本書の意義は、東京語と大同小異とする従来よくある予見を乗り越え、均一と思われがちな神奈川県のことばの中にアクセントの地域差が確実に存在していることを、丹念な調査に基づいて裏づけているところにある。

本書は三部十五章からなる。第一部では研究の背景が示されるとともに、調査地域の概要ならびに調査の手法が述べられる。本書の調査手法は、県内各地域で生育した老年話者を対象に聞き取りを行い、アクセントの記述を試みるというもので、これは方言研究の世界で長らく培われてきた手法を手堅く踏襲したものである。調査語彙に関しても、一部の地名アクセントに関する項目を除くと、そのほかは平山輝男の示した類別語彙に拠っている（本書末尾「資料2」参照）。本書の調査には手法上の目新しさというものはとくにないが、研究の継承という観点に立てば、従前蓄積されてきた方言研究の伝統に忠実に沿うことにはむしろ十分な合理性が見いだせる。類別語彙を拠り所とした調査を行うことは、同じ手法に則って行われてきた数々の方言の記述との間で共通の考察基盤を共有することにほかならないからである。

第二部は、地域別に章を分けて調査結果を記述する構成と

なっている。小田原市方言・中郡二宮町方言・高座郡寒川町方言・三浦市方言・横須賀市東部方言のそれぞれについて、名詞・動詞・形容詞のアクセントの実態を丹念に記述する。二宮町方言については地名のアクセントについての手厚い分析もある。地名には独特の「地元型」アクセントが往々にして起こるが、それは二宮町方言でも同様である。本書では、老年層と青年層とで地名のアクセントに差があること、とりわけ青年層では地元型から共通語型への切り替えが進んでいることが明かされる。地名のアクセントの記述は方言地域でなければ成り立たない調査課題である。この点で二宮町の地名アクセントの分析は、本書の中でも出色の成果の一つと言える。なお、上述の五地点に加えて、本書では足柄上郡中井町方言についても一章を割いているが、この地点については音韻の調査のみが行われていて、アクセントの記述はない。

第三部では、それまでに示された個々の方言の調査結果に基づいて、神奈川県方言アクセントの特徴についての総合的な考察が示される。品詞ごとに章を分けて特徴を論じているほか、最終章では神奈川県方言アクセントの全体的な特徴について俯瞰的な論述を行い、アクセントから見た県内諸方言の地域差および位置づけについて考察している。

以下、いくつか具体的なトピックを取り上げて論評したい。まずは本書の主要な課題である西関東方言アクセントの古相保持に関わる問題である。この問題については各章で調査地点別の検討が示されているほか、第三部第一章にまとまった論述がある。二拍名詞「北」の尾高型をはじめ、三拍名詞の尾高型（「林・東・筵」など）や中高型（「油・涙・柱」など）といった伝統的な型が（横須賀東部を除く）各地点で観察されることから、古形残存の事実はおおかた著者の予測どおり捉えられたと言えそうである。東京語の古形として知られる型が神奈川県方言アクセントの中に見いだせることを明瞭に示した点は、本書ならではの学術的貢献と評し得る。

古形維持の地域差については、やや論を加えるべきと思われる点もある。たとえば寒川町方言では、尾高型（古形）が期待される三拍名詞第Ⅳ類において平板型への移行が著しい。この事実について著者は「二宮町方言や後に述べる三浦市方言の老年層話者の結果と比べると比較的新しい様相を示している」と述べるが（pp. 119-120）、この「新しい様相」というのが地域差として位置づけられるべきものなのかどうかは、慎重な判断を要するところであろう。なぜなら、たまたま当該の話者が新しい型を個人の言語特徴として持っていたという可能性も捨て

きれないからである。伝統的な方言研究では、一名ないし数名の話者を代表としてその地点の言語を記述する手法が採られるが、本書で取り上げているような変化の途上にある現象を相手にする場合には、当該の現象が個人差の範囲を超えて集団的・地域的に発生している現状を捕捉するための、何らかの手法上の工夫も必要であるように思われた。

ところで、本書の全体的なねらいは神奈川県方言アクセントの中に西関東方言の古相を見いだそうとするもので、それはそれで本書で示される多くの記述的事実から首肯できるのだが、これに加えて、古相と新相との境界とも言うべきものが同県内にかなりはっきりと見いだせることも、もっと強調されてもよかったように思う。試みに、三拍動詞の活用形のひとつである「準体助詞＋ガ」形式（「遊ぶのが」）を一例として、各調査地点のアクセントを本書の記述に基づいて整理してみると、そうした境界らしきものは確かにありそうである（本書表3・表8・表18・表22・表25参照）。

アソブノ」ガ（①）＞　アスブノ」ガ〜アスブ」ノガ（②）
＞　アソブ」ノガ（③）

小田原市・二宮町・寒川町にかけては古形のみが起こるが（①）、三浦市では古形と共通語型が併存し（②）、さらに横須賀市東部に至ると共通語型のみとなる（③）。日野資純の言を借りれば「相模川東部方言」の中に境界が見出せそうである。他の調査語句についても、地点別の古形残存頻度を比較精査することにより、新古の境界がさらに精細に描き出せるのではないかと期待されるが、それは本書の着実な成果を踏まえた著者の次なる研究課題となるのだろう。

最後に、本書を通じて評者の関心が大いに刺激された事象に言及しておきたい。本書の調査では、いわゆる古形とされる型だけでなく、アクセントの新たな変化の萌芽も捉えられているように見受けられた。たとえば平板動詞に付属語「たい・そうだ・ながら」が後続した形式のアクセントがそれである。この形式の伝統的なアクセントは平板型だが、近年では起伏化した型への変化が共通語に生じ始めている（例：遊びた」い、遊びそう」だ、遊びな」がら）。興味深いのは、神奈川県の老年層でもこの変化が兆していることである。たとえば寒川町の話者のアクセントは「アソビテ」ー、アソビソーダ、アソビナガラ〜アソビナ」ガラ」といった具合に新旧混然とした様相を呈している（表18）。一方で、小田原市の話者にはアクセントのゆれは見られず、在来の平板型で一貫している（表3）。問題は、こうした違いを地域差と見るか個人差と見るかである。神奈川

県方言の地域差を論じる本書としては前者を答えとしたいはずだが、そうした拙速な断定を避け、現時点では要因を「特定するのは困難」（p. 209）と率直に述べているあたりに著者の慎重さがうかがえる。今後、この興味深い問題が、各地点の話者数を増やした追加調査などを通じて、いずれ著者の手によって解き明かされることを期待したい。

（四六判上製、二五〇頁、春風社、二〇二〇年二月発行、定価三七〇〇円＋税）